

渡嘉敷村指定文化財 史跡「集団自決跡地」

～集団自決の実相・ここであったこと～

〈1945年4月2日 ロサンゼルス・タイムス 朝刊から〉

侵攻軍、日本民間人の集団自殺を発見

「野蛮なヤンキー」の噂で「拷問」より死を選ぶ日本人達

琉球列島、3月29日(遅) (AP) — 米国の「野蛮人」の前に引き出されるよりも自殺する方を選んだ日本の民間人(注. 渡嘉敷島の人々)が、死体あるいは瀕死の状態となって折り重なった見るも恐ろしい光景が、今日慶良間列島の渡嘉敷島に上陸した米兵達を迎えた。

最初に現場に到着した哨戒隊に同行した、ニューヨーク市在住の陸軍撮影兵アレキサンダー・ロバーツ伍長は「いままで目にしたものの中で最も凄惨」と現場の様子を表現した。

「我々は島の北端に向かうきつい坂道を登り、その夜は露営した。闇の中に恐ろしい叫び声や鳴き声うめき声が聞こえ、それは早朝まで続いた」と彼は語った。

散乱する死体

「明るくなってから、悲鳴の正体を調べにいくために2人の偵察兵が出ていった。彼らは2人とも撃たれた。その少し前、私は前方6ヶ所か8ヶ所で手榴弾が炸裂し炎が上がっているのを見た。開けた場所にでると、そこは死体あるいは瀕死となった日本人(注. 渡嘉敷島の人々)で埋め尽くされていた。足の踏み場もないほどに、密集して人々が倒れていた」。

「ボロボロになった服を引き裂いた布はしで首を絞められている女性や子供が、少なくとも40人はいた。聞こえてくる唯一の音は、怪我をしていながら死にきれない幼い子供達が発するものだった。人々は全部で200人近くいた」。

「細いロープを首に巻きつけ、ロープの先を小さな木に結びつけて自分の首を締めた女性がいた。彼女は足を地面につけたまま前に体を倒し、窒息死するまで首の回りのロープを強く引っ張ったのだ。彼女の全家族と思われる人々が彼女の前の地面に横たわっており、皆、首を絞められ、各々汚れた布団が掛けられていた」。

「さらに先には手榴弾で自殺した人々が何十人もおり、地面には不発の手榴弾が転がっていた。日本兵の死体(注. 島人の防衛招集兵)も6体あり、また他にひどく負傷した日本兵(注. 同)が2人いた」。

「衛生兵は負傷した兵士らを海岸へ連れて行った。後頭部に大きなV字型の深傷を負った小さな男の子が歩き回っているのを見た。あの子は生きてはいられない、いまにもショック死するだろう、と軍医はいった。本当にひどかった」。

軍医達は死にかけている人々にモルヒネを注射して痛みを和らげていた、とロバーツ伍長は語った。

負傷した日本人を海岸の応急救護所まで移そうとしている米軍の担架運搬兵らを、道すじの洞窟に隠れていた1人の日本兵が機関銃で銃撃した。歩兵らはその日本兵を阻止し、救助活動は続けられた。

質問に答えられるまでに回復した日本人達(注. 渡嘉敷島の人々)は、米国人は女は暴行、拷問し、男は殺してしまうと日本兵が言ったのだと通訳に話した。彼らは、米国人が医療手当をし、食料と避難所を与えてくれたことに驚いていた。自分の娘を絞め殺したある老人は、他の女性が危害を加えられず親切な扱いを受けているのを見て悔恨の情にさいなまれていた。

記事引用…沖縄県史 資料編3 米国新聞にみる沖縄戦報道 沖縄戦3(和訳編)
注釈は村教育委員会による。

平成17年11月30日指定

渡嘉敷村教育委員会